
姫騎士の恋物語

綾瀬りく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫騎士の恋物語

【Nコード】

N1623F

【作者名】

綾瀬りく

【あらすじ】

平和な時を過ごす、豊穡の国ヒュアラン。姫騎士と呼ばれる第一王女ランは、婚約者を決める宴にうんざりしていた。そこに現れたのは、魔王の末裔ヴォルカン。結婚を申し込んだヴォルカンに、ランは1ヶ月で自分の心を奪えば約束に応じると告げ…？

プロローグ

「構うな、じゃない。そんなに怪我してて、何言っているんだよ。新緑の光の中、まっすぐな眼差しをした子は、そう言っただ怒った。シンプルだが、高価であろうハンカチを躊躇いもなく、真紅の傷口にあてる。

癒しの魔法があるらしいそのハンカチは、受けた傷を徐々に癒していく。

傷が全て癒えた頃には、ハンカチはもう使い物にはなくなっていた。

「いいよ、あげる。魔力はもうないだろうけど、傷口が開いたら、止血するもの必要だし。

申し訳ない、と言うと、その子は何でもないことのようにそう言った。

誰かが、誰かを呼ぶ声がある。

ラシャン。

声は、確かにそう言った。

すると、女の子は慌てたように立ち上がった。

「ごめん。私、呼ばれてるから、行くよ。もう無理するなよ、少年！女の子は、声に応えて走り去っていった。

申し訳ない。

もう一度、口に出してみる。

申し訳ない。

我は、あなた達「ヒト」の最大の敵、忌むべき魔王の末裔だ……。

第1話

ヒュアラン。

豊かな大地を持つこの国は他国との争いもなく、平和で静かな時を過ごしていた。

強き瞳を持つ第一王女ラシャンは気さくな人柄からランの愛称で親しまれ、また、姫騎士の名の通り、民を護る為の武を極めていた。

無論、年頃の姫として、日々婚約者候補が列を成すのだが、ランは「弱い男は嫌い」と一蹴するばかり。

舞踏会を開いても、友情を深める会話を交わすばかりだった。

業を煮やした父王は、婚約者を選定する宴を開いた。

王位をランに譲る父王は、伴侶のいない王がどれ程軽んじられるかというのを知っていたからだ。

ランの前で、まるで何かの面接のように次々と貴族の子息が現れる。適当にあしらいつつ、王女って自由がないなどと溜息を心の中でついていた、その時だった。

「我も名乗りを上げて良いか」

その声は呼ばれた誰とも付かない、否、誰であるかは分からないのに、誰もが知っている声。

空気に馴染むようにして、漆黒の髪が流れ、ふわりと舞った。

何も読み取らせようとしないその瞳の色は、真紅。

ずっとその場に立っていたように、突如現れたのは1人の青年だった。

神話の中に記されていた、闇の魔王。

英雄に滅ぼされた筈の魔王そのものの姿だ…。

その末裔が辺境に生きているという噂はあったが…。

流れるような足取りで、青年は悲鳴を上げて道を開ける貴族の子息達に視線もくれず、やってきた。

「我が名は、ヴォルカン。闇の流れを汲む者。

ヒュアランの姫騎士に結婚を申し込みたい」

向けられる剣。槍。魔法。

いずれも見えてなどいないように、彼は、ヴォルカンと言った。

ランは、自分を見つめてくるその視線を真っ向から見据える。

真紅のその色は、自分をどこか懐かしいように見つめている。

魔王の末裔だと言うには、余りにも澄んでいるようにも見えた。

「1ヶ月だ」

ランは、短く言い放った。

静寂に、緊張の糸でピンと伸びたような、そんな空気が流れる。

啞然としている周囲を他所に、ランは言葉を続けた。

「1ヶ月、私が所有している中で、空いている離宮の一つを貸す。

その期間において、言葉のみ、私に触れず、私に危害を加えず、私に魔を掛けず、私を口説くことが出来れば、私はあんたの嫁になつてやろう」

「出来なかつたら？」

静かな表情で、ヴォルカンが問う。

不敵な笑みをランは浮かべ、剣をヴォルカンに向けた。

「魔王の血を持つ者として、私に討たれるんだね」

さあ、どうする？

そう言わんばかりのランに、静かだがしつかりとした言葉が空間に響いた。

「1ヶ月だな」

それは、事実上の申し出受け入れの言葉だった。

予想外にアツサリと受け入れ、ランは内心驚いた。

（それだけ、自信があるってこと？）

その間に、自分のことを愛するようになるという絶対の自信の現われだと言っただろうか。

「驚くことではないだろう。我は、その為に来た。その為に必要なことをするだけだ」

静かで静かな真紅の瞳にランは、何故か思った。

（こいつは、私を知っている。

私も、こいつを知っている）

だが、記憶の糸を手繰り寄せても、何も思い出せなかった。

そして、運命の1ヶ月が始まった。

第2話

―1ヶ月以内に、言葉のみで心を奪うことが出来れば、姫騎士は魔王の末裔に嫁ぐ。

その噂はあつという間に近隣諸国に広まった。

ランのご機嫌取りにやってきていた貴族の子弟達は、その恐ろしさにその足を止め、遠くで様子を伺っている。

（所詮その程度か）

ランは、心の中で吐き捨てる。

自分を本心から妻に望むのであれば、恐れることはないだろう。つまりは、そういうことなのだ。

ヴォルカンランはランの命で危害を加えられていないが、それでも敵意の籠った視線に囲まれていても、何にも流されることなく、自分に気持ちを向けてきている。

（気に入らない）

ランは、武の稽古の間もじっと自分を見つめている青年を見る。

静かで静かな視線は、懐かしいものを見るような優しさに満ち溢れていた。

他の求婚者達とは違う、純粹な好意がそこには込められている。

（気に入らない）

ヴォルカンだけが知っている、そのことがランを苛立たせた。

「熱心ですね」

ヴォルカンはそんな声を掛けられ、振り返った。

背後に立っていたのは、身なりの良い、空色の髪をした青年だ。ヴォルカンも面識はないが、その人物の名は知っていた。

「青竜の王子か」

隣国の王家の末弟で王位からも遠いが、ランの兄弟子であり、騎士団の将軍となっている。髪の色とその戦いぶりから、青竜の王子と呼ばれているのだ。

彼は、その呼び名を余り気に入っていないらしく軽く肩をすくめ、苦笑した。

「俺のことはいいとして。

噂を聞いて、来たんですよ。あいつの夫が魔王、となれば、近隣諸国にも影響が来るだろうという父上のお考えで」

「ご苦労なことだ」

「でも、杞憂かな」

青竜の王子の言葉に、表情にこそ出さなかったがヴォルカンには驚いた。

「あなたは、末裔かもしれませんが、魔王ではありませんね。

血に魔の匂いはあるけれど、意思に魔を感じない」

そこで、クスリと彼は笑い、続けた。

「ランはそれを、本能的に理解している。

あいつの求婚者とは、根本的に違う、無償の好意だと。

だから、あんなに機嫌が悪い」

ランがそこで青竜の王子に気付き、こちらへやって来る。

「セレスト、やっぱり来たのか」

「ああ、まあ。他の国も来てるんじゃないのか？」

「来てるけど、コイツの近くに来て話しかけたのは、あんたが初めてだけだ」

相手は魔王の末裔なのに、というニュアンスはヴォルカンにも分かった。

それはごく自然なことなので、別に驚くことはない。

当の青竜の王子ことセレストは、少し不思議そうな顔をして言った。

「血の流れはあるかもしれないが、フツーだろ。偏見は良くないぞ？」

そっぽを向き、ランは口の中ではそばそ毒づく。

それを余所に、セレストはヴォルカンに笑顔を向けた。

「妹分のこと、よろしく願いしますね」

それだけ言くと、手をひらひら振って、セレストは帰っていった。
ヴォルカンは隣を見る。

歯軋りをしていたランだったが、セレストの姿が消えた途端、少し寂しそうな顔になった。好意から来るものではなく、どちらかと言うと、何かを羨むものから来ているように見えた。

「あいつは、いいな……」

ぽつりとランが呟く。

ヴォルカンは、言われた意味が分からなかった。

「あいつ、傭兵の娘を嫁に迎えるんだって。」

好きな人と結婚出来る自由が、あいつにはある。

……ううん、あいつの度量の広さが、そうさせてる。

私には、出来ない。

だから、いいなって思う」

そこまで語って、ランは内心舌を売った。

自分の弱さを彼に露呈した自分が許せなかったのだ。

だが、ヴォルカンの反応は違った。

「我は、そう思えるあなたの素直さがあなたの良い所だと思うが」
自分にはないもの。

その事実を受け入れるだけの素直さが、ランには備わっている。
いつかきつと、その素直さが道を拓くだろう。

言われた方は、鼻にしわを寄せた。

「そんなこと言っても、惚れないからな」

「無論」

ヴォルカンは穏やかに言った。

「この程度で心奪われる姫君を、我は求めている訳ではないのだから」

その晩。

ランは剣を磨きながら、ため息をひとつ零した。

それは言うまでもなく、約束のことだ。

好きになる訳がない。

そう思ったからこそ、提案した。

魔王の末裔を討伐する。

その為に、提案した。

それが分らないヴォルカンではない筈だ。

なのに。

「この程度で心奪われる姫君を、我は求めている訳ではないのだから

静かで深い想いを、彼は向けてくる。

あんな風に見つめてきた者が、今までいただろうか。

そこまで考え、ランは首を激しく左右に振った。

（考えるな、そんなことは）

姫騎士としてすべきことは、1ヵ月後に末裔を打つことだ。

だが、その度にセレストの言葉が過ぎる。

何度も何度も首を振って、ランはその言葉を打ち消す。

それこそが、意識の表れであることにランは気づかなかった。

無視をするということ、それこそがヴォルカンに対する意識の存在を明確にしていることに、気づかなかった。

夜が更ける。

今宵も、ランは眠れそうになかった。

第3話

時間は、緩やかに、けれど早足で過ぎ去っていく。

魔王の末裔であるヴォルカンは、穏やかにランだけを見つめていた。媚びることもへつらうことも、ヴォルカンはしなかった。

無論、魔王の末裔にそんな論理などないと思うが、それでもランは自分の周囲にいかにそういった人間が多かったことに改めて気付かされた。

言葉はそう多くないが、穏やかに的確に話すヴォルカンの空気は、心地良かった。

少しずつではあったが、ランは魔王ではない、ヴォルカンと話すようになっていった。

「でも、あんた、変わり者だね」

「そうか？」

「変わってるわよ。話したこともない女と結婚したいなんてさ」

ランがそう言うと、ヴォルカンは少し優しく苦笑する。

何故か、ランはその表情がいいなと思った。

心惹かれてはいけない相手ではあるし、猶予が終わったら倒す相手だが、他人に感じない何かを感じるのも事実だった。

毎日のように、ヴォルカンのいない場所でランは、国王や宰相、將軍から魔王の末裔に心を許してはならない。一カ月後に魔王の末裔を討伐し、国の平和を取り戻せと言い含められている。

その言い分は、自分にも分かる。

王女として、魔王の末裔を討つのは当然のこと。

だが、違和感を感じるのも事実だった。

魔王「悪、それはそう思うが、思っていたような邪気も感じなかった。

それは、彼が彼の話す通り、魔王の末裔にしか過ぎないからだろうか。

そこまで考え、ランは首を振った。
意識してはいけない。

あれは、魔王の末裔、魔王の血を持っているのだ。
ならば、魔王になる可能性がある。

姫騎士として、国を護る為に倒さなければならない。
その為の時間なのだから。

「ラン？」

ヴォルカンの声でランは我に返った。

先程まで歴史書を読んでいたヴォルカンがそこに立っていた。

そうだった、ヴォルカンの願いで書庫を案内し、監視役として留まっていたのだった。

ランはヴォルカンを見、ずっと思考を巡らせていた自分を恥じた。
だが、ヴォルカンはそれに気づいた様子もなく、静かに微笑んだ。

「やはり国の書庫は良いな。我が読んだこともない本が沢山ある」
興味深い、と言うヴォルカンは読書を好んでいるのだろう。

何気なく本のタイトルを追っていたが、歴史書が殆どで、意外なことに童話のような本も幾つかあった。

「そーいうの、好きなの？」

「おかしいか？」

「いや、意外だっと思ったから」

何気なく聞いたことに苦笑され、ランは軽く肩を竦めた。
確かに、と呟くようにヴォルカンは言う。

「童話のような話は、夢があつていい。

特に、楽園エリュシオンの話は好きだ。

我も行ってみたいと何度も思う」

自分も好きだ、とは口が裂けても言いたくなかった。

彼と同質に感じられてしまうから。

だが、穏やかな風が吹く楽園に思いを馳せる姿を見て、この世のどこにもヴォルカンの居場所がないのだと、何となく分かった。

魔王の血を引いている、その事実が今までどんな道を歩ませていた

のだろう。

顔も知らぬ先祖の為に、どれ程…。

ランは短く舌を打つ。

だから、考えてはダメだ。

危つく傾きそうになった自分を戒め、きつくヴォルカンを睨みつける。

「そんな楽園は御伽噺だね。

大体、魔王の末裔であるあんたが楽園に行ける訳がない。

あんたが行くのは地獄だ」

吐き捨てて、ランは後悔した。

ヴォルカンは怒る訳でも泣く訳でもなく、寂しそうに微笑しただけだった。

罵ってくれば、そんな気持ちも起きなかったのに。

そんな優しさを向けないで欲しかった。

今、自分が何を感じているのか。

今、自分が何を考えているのか。

ランは、分からなかった。

分からなくなってしまった。

その晩、ランの元をセレストが訊ねて来た。

あの日からセレストは数日毎に訪れ、ランだけではなくヴォルカンとも取り留めのない話をし、ひと時を過ごしていた。

無論、それは王家の一員で將軍である彼の任務なのだろうが、隣国の暴発を防ぐ為に奔走していることもランは宰相を通じて、知っていた。

そして、攻め込むという案を何とか封じようとしている彼に内部からも危険視する声も多く、逆賊として討つべきだと言う声も出ていくというこも。

本人もそのことを知っていたが、変えようとはしない。

「戦場でもない、戦士でもない、魔の意識に奪われている訳でもない、そんな人間を討つのは騎士のすることではないからな」

ランがそれを尋ねた時、セレストは事も無げにそう言った。

その意識の所為か、ヴォルカンとも普通に話し、俗に言う“男同士の話”もしているらしい。

こうしてランを訪れ、兄弟子として話をしていく日というのも勿論あるが…。

「何かあったのか？」

セレストはランを見るなりそう言った。

顔に出てしまっているのだろう、ランは特に偽ることもせず淡々と今まで抱いてきた感想をセレストに話した。

変化が訪れていると自分がする話の中でランは何となくそう思った。魔王の血を持っている「悪」、その方程式を持ちながら、否定しながらっている自分がいるのだと思う。

それがセレストにも伝わったのだろうか、セレストはただ、ただ、穏やかに聞いていた。

話し終わった所で、セレストは口を開いた。

「ヴォルカンは、何故、お前の元に現れたと思う？」

「…分かんない」

「人前、それも姫騎士と名高いお前の前に現れることは、かなりの危険が伴う。それを彼が分かっていただろうというのは分かるかな？」

「…うん」

あの場で戦闘が起きても、何の不思議もなかった。

「今の状況も危険、それも分かっているだろうというのも分かるかな？」

「…うん」

約束の時間が来れば殺される、否、今も殺される危険がある。それは、ランにも良く分かる。

「ヴォルカンは、力ずくでお前を攫おうとしなかった。

無論、お前は強い。簡単にはいかないだろうが、魔王の末裔としての魔力は強大、魔法を使えば造作もなかった筈。

だが、ヴォルカンはその手を使わず、お前の提示した条件を呑んだ。どういう意味なんだろうな、それは」

そこまで言くと、セレストは腰掛けていたソファから立ち上がった。

「ヒントはここまで。

後は自分で考える。

ラン、魔王ってのは、血筋じゃないと俺は思うぞ？」

ひらひらと手を振って、セレストは後にする。

ランは鼻に皺を寄せ、残っていた紅茶を一気に飲み干す。

「そんな考え、あんただけだよ」

でも、何故だろう。

その考えに頷く自分がいた。

第4話

夜が更けてもランは寝られなかった。

セレストの言葉が頭に焼き付いていた。

何故、セレストはそう考えることが出来る。

忌むべき魔王。

その血を持った者を何故受け入れる。

ランがヴォルカンに心を奪われる、ということは、この国の未来の女王の夫が魔王になるということ。

隣国の王家に連なり、將軍の地位を持つセレストは、恐怖を隣人にすることを許容すると言うのか。

その為に、戦が起きないよう奔走しているのか。

（分からない）

セレストは、血で魔王になるのではないと言う。

リスクを冒してランの前に現れ、その力を行使せず、条件を呑んだということを描き、魔王に心を許してはならないと思うランに別の見方を示す。

（何故）

ランには、分からなかった。

（一体、何を話しているのだろう。）

何の言葉を交わしているのだろう。）

そう思うと、眠れなかった。

「空気、入れ替えに行こう……」

ランはベットから抜け出すと、マントを羽織った。

満月の夜は美しい、とランは思う。

どこか神秘的で、どこか安らぐように思えるからだ。

（昼はあんなに生き生きとした世界なのに）

ランは心の中で呟く。

庭園をそうして歩いていると、ランは風の中に声が混じっていることに気づいた。

そして、それは確認するまでもなく、ヴォルカンのものだった。

思考が頭から過ぎ去り、不安でランはその声の方角へ走った。

ヴォルカンは庭園の東屋にいた。

ヴォルカンの周囲には、人前には滅多に姿を現さないという精霊がいた。

彼は、精霊と会話をしていたのだ。

「我のことなら心配はいらない。大丈夫だ。

それよりも、怪我の具合はどうか？」

良かった、と微笑う表情は声と同じで、とても優しくかった。

何らかの理由で怪我をした精霊に治癒の魔法をかけていたのだろう。

心優しくなければ、それは出来ないし、精霊も彼を思い、ここまでは来ないだろう。

セレストがどんな言葉を交わしているのか、どこまでヴォルカンを解かっているのかは分からない。

だが、この優しさに気づいたのだとランは思い、こんな光景見なければ良かったと即座に後悔した。

魔王であれば、国の為と憎むことも出来る。

どんなに得難い人物だと感じていても、国を護る為に剣を向けることも出来る。

だが。

（こいつは、魔ではない）

ヴォルカンを、最早魔王の末裔として見ることは出来ない。

ヴォルカンは、魔王にはならない。

そう、解ってしまった。

「ラン？」

その声でランは我に返った。
気がつけば、精霊は夜の空に舞っており、東屋にはヴォルカンしかいなかった。

ランは、自分がどんな表情をしているのか、分らない。

ヴォルカンが優しく苦笑する。

「すまないな、離宮は騎士が多くて精霊が怯える」

ヴォルカンが身を置いている離宮には監視役として騎士団が何十人と常駐している。ヴォルカンならば彼らを掻い潜って外出することなど訳はないのだろう。実力で彼らを屈服させ、外出などする訳がない。

魔王の末裔であっても、魔王などではないのだから。
黙っていたからか、ヴォルカンはその苦笑を深めた。

「心配しなくとも、もう戻るつもりだ」

「そうじゃない」

ランはその言葉を遮った。

驚くヴォルカンの瞳を真っ向から見つめる。

倒すべき相手としてではなく見つめたのは、この瞬間が初めての筈だったけれど、そうではないような気もした。

「何をしたら、セレストはあんたの味方になる」

口から出た言葉は存外に強くて、それも自分の意図とは微妙にずれていたけれど、ヴォルカンはそれに気づいた様子もなく、きょとんとした表情を浮かべた。

「セレストか？特別なことはしてない。強いて言うなら、友達になった、ということだな」

「何だよ」

ランは苛立った。

「何で、そうなのよ」

ヴォルカンは流石にランの様子がいっもと違うことに気付いたらしい。

それが表情に走っていた。

無理に問おうとしない。

それにもランは苛立った。

「あんたは、魔王の末裔だ。

皆から恐れられて生きる魔王の血を持っている筈だ。

なのに、何であいつは、あんたを恐れないのよ。

どうして、私に魔王の末裔だと思わせないのよ。

私はあんたを討たなければならないのにつ！！

何で、何であんたは魔王になろうとしないのよっ！！」

一息で言った言葉の後、ランは歪んだ視界の中に古ぼけた布切れを見つけた。

それに、見覚えがあった。

誕生日に貰った、癒しの魔力を持ったハンカチ。

そんな魔力が宿っていることよりも、シンプルだが価値があるということよりも、亡き母が素敵な騎士様の第一歩よ、と病床であったのにランの為に自ら選んで買ってくれたということが嬉しかった。だけど、どこかで無くしてしまっ……

（違う、そうじゃなかった）

ランは忘れていた情景を蘇らせる。

あのハンカチは、傷ついた、同い年ぐらいの男の子を癒した。

魔力は尽きたけど、止血する布には役立つだろうとその男の子に、あげた。

騎士ならば、そうしたから。

ぼやけていたそれは、急速に鮮烈な色を帯びた。

「まさか」

だが、思い出してみれば確かにその面影をこの人物は持っている。

「そうだ、ラン。

我は子供の頃、あなたに命を救われた。

あの時のお礼がずっと言いたかった」

ヴォルカンはそう言い、静かに微笑んだ。

「
ありがとう」

その一言は、優しく、けれど、残酷にランを打ちのめした。

第5話

どうしよう。

あいつは、魔王じゃない。
どうしよう。

あいつは、本当に私のことが好きだ。
どうしよう。

…あいつを、否定出来ない。

ランはそれを億尾にも出さずに自らの離宮に戻ると、膝を抱えて座った。

知らなければ良かった。

そうすれば、こんな自分を知らずに済んだ。

知りたくなかった。

こんな自分の姿など。

何もかもが鮮明になった今なら解かる。

魔王、その血を引くヴォルカンは幼少から苦難に生きていたこと。

その為に傷を負わされたこと。

その彼に手を差し伸べたこと。

それが、どれ程ヴォルカンにとって大きなことだっただろう。

だから、ヴォルカンはあの場に現れ、自分の出した条件を呑んだ。
手を差し伸べた自分を、心から想っていたから。

(どうしよう)

ランはぎゅっと目を閉じた。

動揺している自分がいた。

その日を境にランは口数を減らしていった。

自分の変化を悟られるのを恐れ、部屋の中に籠ることもしなかったが集中出来ないからという理由をつけ、一人で武芸の鍛錬に励むことが多くなった。

ヴォルカンとも会話の数が減ったし、態度もよそよそしいものになった。

変化をヴォルカンは感じたかもしれない。

だが、ヴォルカンはそれを聞こうともしなかったし、言わせようともしなかった。

変わらず、穏やかな表情を向けるだけ。

満ち足りたその笑みは、ランを更に追い込んだ。

（何故）

その答えは、もう、分かってしまった。

だから、追い込まれる。

もうじき1ヶ月が訪れようとしている。

こんな調子で迎えたら、自分は、ヴォルカンを討てるだろうか。討たなければならぬのだ。

魔王の末裔を女王の夫にしない為に。

それを警戒する周辺諸国を安堵させる為に。

けれど、あと数日という頃だった。

セレストが投獄されたと言う報告がもたらされたのは。

戦を避けようとするセレストは、逆賊とされ、王子の位を剥奪、恋人と共に投獄され、ヴォルカン討伐と同時に処刑されるのだという。

「あいつ、馬鹿だ……」

ランはぎりりと歯をかみ締める。

戦を避けること。

魔王ではない人間を討伐することは、セレストの騎士としての信義に反するだけでなく、戦は、両国の民の為にもならない。

そうした考えを、曲げなかった。

自分が討たなければ、セレストはもう、ランが一度も会ったことがない彼の恋人と共に処刑される。

恋愛感情ではない、けれど、実の兄のように思っていたセレストが自分の所為で殺されるのは耐えられなかった。

だが、ヴォルカンを討つのは…、今の自分に出来るかどうか分からない。

「ラン」

いつの間にか、ヴォルカンがそこにいた。

どんな表情を向けているか、ランは自分でも分からない。

ヴォルカンは安心させるように微笑んだ。

「セレストのことは我也聞いた。

我が討たなければ、彼は助からないだろう」

言葉を切り、ヴォルカンはその笑みを深めた。

「約束の日、我を討つといい」

ランは目を見開いた。

言われた意味を、瞬時に理解することは出来なかった。

流れた静寂の世界に優しい言葉が哀しく響く。

「あなたに討たれるのなら。

私の初めての友が助かるのなら。

私は、喜んで命を差し出そう」

話はそれだけだ、とヴォルカンは静かに去っていった。

ランは、自分でも分かるくらい、ひどく動揺していた。

やがてそれは苛立ちに変わり、拳を壁に打ち付ける。

「何で死んでもいいなんて、言うんだよ……」

涙が世界を滲ませる。

ヴォルカンを想い、泣いている自分を自覚した。

それが、どんな感情から来るものかは、ランには解からなかった。

そして、約束の日は、訪れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1623f/>

姫騎士の恋物語

2010年10月28日04時56分発行